

二〇〇〇年十二月十二日 第三種郵便物承認 毎月(1・2・3・4・5・6・7・8の日)発行

発行人 関西障害者定期刊行物協会

大阪市天王寺区真田山

K S K S

ゆいゆい通信

No. 108 20. 8. 31

編集人 社会福祉法人 寧楽ゆいの会
〒631-0823 奈良市西大寺国見町3-5-5
TEL/FAX 0742-41-6039定価 1部 50 円
年間 300 円

◆法人からの報告

「コロナ対策も支援も続く」

理事 田岡 めぐみ

◆Reports

精神・発達雇用企業サポート事業

／ぐっど・たいむ … 5

さわやぎ／ほすと … 6

きらく舎／歩っと地活 … 7

訪問看護ゆいゆい … 8

◆News

◇奈良市障がい福祉課 新相談員

… 2

◇生活訓練りべるて 訪問支援開始

… 2

◆Reports

◇2019年度寧楽ゆいの会生活実態調査

… 3

◇法人決算報告

… 4

◆Thanks

後援会費納入者

… 8

冷静な対応
丁寧なコミュニケーションを
～コロナ対策も支援も続く～

残暑も厳しく、新型コロナウイルスの影響により安心できない日々が続いています。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

今年の春の奈良公園は、鹿の群れが満開の桜の木の下でお花見をしていました。5月の連休には、若草の中飛び跳ねるたくさんの「小鹿のバンビ」に出会いました。人の気の静かな奈良公園は別世界のようでした。

奈良時代にも疫病が大流行し、犠牲者が多くなるにつれ、人々は不安や怖さから神や仏に助けを求めました。また、何か原因らしいものを探して作り上げ、「差別」の構図はすぐに生まれたといいます。今でも同じ様子で、「夜の街」とか「医療従事者」とかよく聞きますが、それらと関係なければ自分たちは大丈夫という安心感を得るのでしょうか。長い歴史で、このようなことが起きるたびに、未知のものへの不安から文化も人の価値観も変わっていったのだろうか、と思いました。

緊急事態宣言中、障がい福祉や介護保険のサービスは休業できるものではなく、休業要請もあり



ませんでした。対面の支援は避けられるものではなく、今まで通りの生活を継続できるよう、感染防止に細心の注意をした支援がこれまで同様、これからも続くのだろうと思っています。

法人としては、「正しく新しい情報を知り、冷静に対応していこう」と、自分たちにできるコロナ対策を、メンバーもスタッフも協力して行なっています。新型コロナウイルス対策は、今までの生活スタイルを変えました。人と人とのつながりも今までと違ったものになりました。新しい生活様式もなかなか慣れない日々が続きます。三密を避けながらも、丁寧なコミュニケーションを取って、より密な信頼関係を築けるよう、意識していくたいと思っています。

(田岡めぐみ)

News

奈良市 障がい福祉課に専門相談員が増えました！

今年4月から、奈良市障がい福祉課生活支援係に新たに1人精神保健福祉相談員が配置されました。新しい相談員の名前は『小灘 美香（こなだみか）』さんです。

入職後しばらくは、コロナウイルス感染拡大防止のため、電話相談や事務などが中心になっていましたが、6月からは訪問や地域に出ての相談業務も行なっています。

小灘さんは、相談員の仕事について「まだどこにも繋がっていない人のお話を聴き、必要なサービス等に繋ぐことが役割のひとつ。本人の生活が変わるきっかけやスタートラインのお手伝いができるところではないか」と話します。また、「ご本人のなりたい自分や夢に寄り添って、できるだけ近付けるように一緒に考えていきたい」「色んな経験を通して、ご本人にも障がい福祉課にとっても早く役立てるように頑張りたい」と意気込みを話します。

平成27年から奈良県精神保健福祉ボトムアップ連絡会が、障がい者の相談支援体制の充実を要望していたこともあり、奈良市は平成30年度に精神保健福祉相談員を2人増員。以降、毎年相談員を採用しており、相談員は計6人になりました(内、生活支援係配属は3人)。



(河田友見子)

出身は、鳥取県です！

その人らしい生活を一緒に考えたい

生活訓練りべるて 訪問支援スタート

「その人一人ひとりの『つながり』を作っていくことを意識していきたい」そう話すのはNPO法人あず 多機能型事業所りべるてのスタッフ田村亮子さん。りべるては、令和2年4月から生活訓練事業として、訪問支援サービスを始めた。

「この訪問支援が、地域に埋もれたニーズを掘り起こしていくきっかけになれば」田村さんは続ける。「ひきこもっている人や、既存の通所福祉サービスに登録はしているがなかなか通所がままならない人、入退院を繰り返している人などが、安心して暮らしていくために、訪問で支援を届けたい」

▼強みは「支援の密度」

りべるてはこれまでも、必要に応じて訪問での支援を行なってきた。「既存の通所系事業所や相談支援でも訪問自体は可能だと思う。でも、生活訓練での訪問は対象人数を絞って一人ひとりに密に関わることが強み」訪問支援は、頻度や内容もその人に合わせて柔軟に対応するという。



相談に乗る田村亮子さん

▼「ピア」との協働も視野に

新たな取り組みも始めている。「りべるてに通所しているメンバーにもボランティアでピア活動として訪問に同行してもらうこともある。当事者の人たちが体験を通して伝えられることがたくさんあると思っている。こういった活動が広がって、奈良でもピア活動の文化が根付けばいいなと思っている」と、田村さんからは期待が語られた。

(和田良介)

Reports

寧楽ゆいの会

2019 年度 生活実態調査 結果

～ 年代と性別からみる事業所のこれから ～

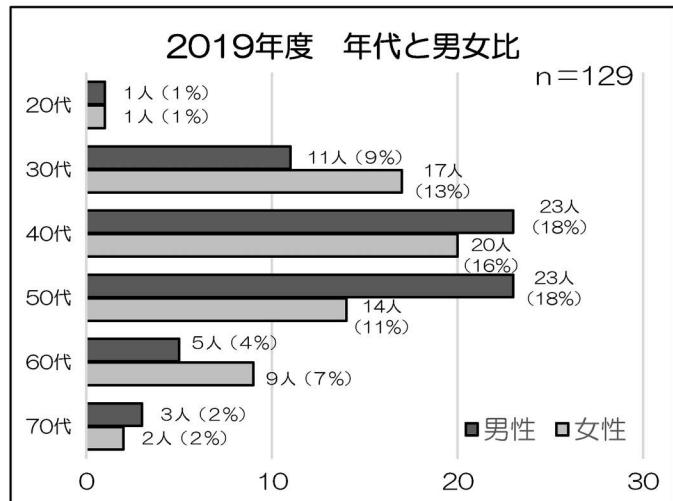
寧楽ゆいの会は、法人や各事業所の活動内容や方向性を整理し、今後の取り組みに反映させていくことを目的に実態調査を毎年行なっています。調査対象はゆいの会の障がい福祉サービス事業所、地域活動支援センターなどの通所事業所を利用しているメンバーです。

(ゆいの会実態調査結果全体の報告は「2019年度社会福祉法人寧楽ゆいの会 活動の概要」冊子に掲載)

◆性別と年齢比◆

2019 年度調査において、メンバーの男女比は、「男性」66 人 (51.2%)、「女性」63 人 (48.8%) であった。年齢は、「20代」2 人 (1.6%)、「30代」28 人 (21.7%)、「40代」43 人 (33.3%)、「50代」37 人 (28.7%)、「60代」14 人 (10.9%)、「70代」5 人 (3.9%)。平均年齢は 48.1 歳、最年少は 22 歳、最年長は 79 歳であった。

約 10 年前の 2008 年度調査時は、男性 62.8%、女性 37.2%、20 年前の 1999 年度調査時は男性 64 %、女性 36% であった。少しずつ女性の利用割合が高くなっていることがわかる。



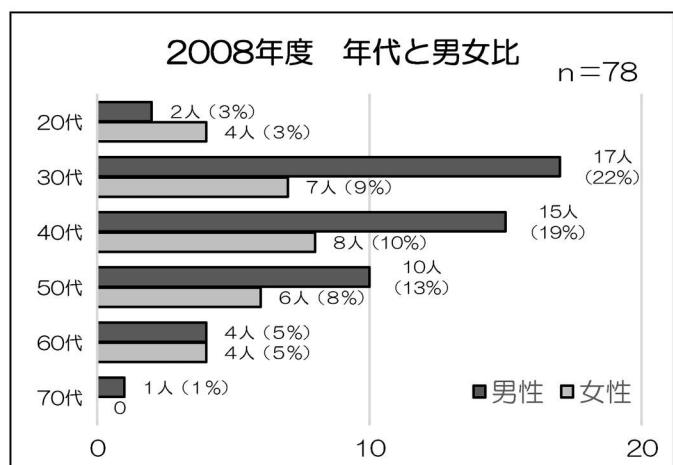
◆考察◆

事業所別にみると、男女比に大きな差がみられるところがいくつかあった。同じ生活介護事業だが、『さわやぎ』は女性利用者が多く、『ピアステーションゆう』は男性利用者が多い。『さわやぎ』は活動の中に、織りや手作業があり、『ピアステーションゆう』は事務系の活動が多い。男性は織りや手作業よりも、事務系の活動を選んでいることが考えられる。

昨今、株式会社や合同会社が運営している福祉事業所も増えている。昔に比べ、活動内容によって利用する事業所を選べるようになったことが事業所利用者の男女比にも影響していると考えられる。

2020 年 4 月から本法人では、『ピアステーションゆう』『スペース TAKU』が閉所となり、新たに就労継続支援 B 型事業所として『ほすと』が新設された。

新たな事業展開を考えるにあたっては、これま



でゆいの会が取り組んできた生活相談支援や、日中活動の場、居場所を目的とした事業所の機能に加え、魅力的な活動や利用者の役割の創出が求められている。また、40~50代の利用者が増加傾向にあることから、本人・家族の加齢に伴う家族全体への具体的な援助を展開するために、他機関との支援協働の実践について考えていかなければいけない。

(米田有沙)